

那覇地区学び『一步の会』授業研究会

【授業者】

2年1組 K先生 国語 「わにのおじいさんのたからもの」

6年1組 M先生 社会 「戦争と人々の暮らし」

6年3組 S先生 社会 「戦争と人々の暮らし」

本日は、那覇地区の先生方で立ち上げた「学び一步の会」の授業研究会（セミナー）である。近隣の学校からの参加者を含め30名ほどの先生方が参加して授業公開と研究協議会が行われた。

下の写真は授業終了後の、各教室で行われた研究協議の様子である。交わされる言葉に柔らかさを感じる。みんなが子どもの学びについて語っている。授業を観察する際の「学びの視点」がかなりしっかりしてきていることを感じる。私が一番うれしいことは、参加された先生方が笑顔であることです。笑顔で語れなくなったら危機である。



授業終了後のグループ協議



授業終了後のグループ協議



授業終了後のグループ協議



【2年1組 K先生】

声を柔らかく、頬の力を緩めゆったりしっとりやっていきたい教師の心が見える。この何とも言えない「ほんわか」とした息遣いが、子ども達を安心して授業に参加できる空気をつくってくれる。

大型教科書には、教師の教えたいことでなく、子ども達の「声」が反映されている。教室の仲間の「考え」から、教師も仲間も学ぶのである。



写真①



写真②

写真①、この字の中央の空間で子ども達がくっつき合って教師から下ろされたテーマや、仲間の疑問についてボソボソと語り合っている。

写真②、席に戻ると今度はペアでボソボソときき合っている。教師は子どもの考えや「なぜ？」を仲間につなく。距離が近いので小さな声の子もしっかり参加できる。低学年では1時間に10回くらいはペアに下ろすことを心がけたい。

【すてきな支え合い】 2枚の写真の共通点は何？

写真③、一人を支える一人の仲間、僕の方から聞いている仲間は大好きである。写真④、一人の発言者を支えるみんなである。しっかり聞いてあげるは発言者を一番支えてあげることになる。教師が意図的に体を向かせたのがつながりと関係をつくることになる。

どの写真も「聴く」という行為に仲間が支えられていることの視点を持つようにしたい。

【2枚の写真】 [子どもから学び、同僚から学ぶ]

教室を開いてくれた教師がいる。しっかり観てあげるのが礼儀である。写真の教師は他校からの参加、子ども達のかわいい表情が参観者の教師に映し出された。子どもも教師もなんと素敵な笑顔である。授業公開者もうれしいのではないだろうか。この様子を協議会でぜひ伝えてあげて下さい



写真③



写真④





[6年1組 M先生] 元気が印象的であるが、統制型では全くない不思議な魅力を持つ。



写真①

「私は、教師として子ども達を『こう』育てたい。」授業や子ども達の関係づくりに一人の教師としての信念とポリシーを熱く感じる。子ども達も以前の訪問時には感じられなかった「安心した雰囲気の中でのしっとり感」が感じられる。非常に言葉で説明しにくい空気である。

6月の佐藤先生の訪問の際、「自立に向かっていくが協同に向かっている。高学年に幼稚さがうかがえる。」等の言葉を頂いた。・・・しかしである。今日の子供達の変容の姿をぜひ佐藤先生に観ていただきたい。子ども達の柔らかな表情や言葉、きき合い・支え合い、ブツブツ・ボソボソ、みんなが向き合っている。素敵な教室である。

写真①②、授業者による学びのリセット、学習テーマの方向の確認である。教師の言葉がしっかり子どもの心に届いていることが確認できた。写真③、まさにきき合い・支え合いである。写真④、この子の「持ち味」をぜひ教室でいかしてほしい。この子にとっても教室が一番安心できる居場所であってはならない、社会科のお勉強が大好きであるのは明白である。それをどう仲間につなぐか、授業者のデザインである。



写真③



写真②



写真④

[6年2組 S先生] 教師にも個性がある。この教師が立つと周囲が和やかな雰囲気になる。間違いなくこの学校に行ってもムードメーカー的存在の役割を担うことになるだろう。私らしさを大切にしてほしい。



授業は「戦争と人々の暮らし」単元導入である。本時は、単元全体のページから「気づいた」ことや「なぜ」を写真や文章から付箋紙に拾いだし全員で共有し学習の見通しを持つことがねらいである

きき合っている。実にブツブツ、ボソボソ。グループにはしたが、活動は自分の気づきや疑問を見つけることである。しかし、写真や文章の中から「これってどういう意味?」「これなに?」遠慮なくきき合っている。途中、付箋紙が足りなくなり何度も授業者は要求されていた。

写真⑤、教師の話に体と心が向けられている。距離が近い分、言葉も小さく少なくで済む。教師の視線が子ども達の表情をしっかりと見とって語っていた。

写真⑥、たくさんの気づきや疑問が出てきました。一人で十数枚書いている子



写真⑤



写真⑥

もいました。後はカテゴリー別に整理し探究していくことです。当然、探究の中でも「なぜ?」は繰り返し子ども達の思考に出現します。子ども達の「なぜ」を仲間やテキストに「つなぐ」のが授業デザインです。

[ジャンプ課題について] 佐藤学 『学校を改革』するより抜粋P28~29

◎《基礎》から《発展》へ学びが進むとは限らない

《共有の課題》が教科書レベルであるのに対して、《ジャンプ課題》は、教科書レベル以上の課題である。一般的に言って高ければ高いほど良い。クラスの3分の1程度が達成できるレベルが妥当だろう。学びにおいて最も重要なことは夢中になることである。子どもは「わかりそうでわからない課題」において夢中になる学びを体験できる。…一般的に学びは基礎から発展へと進むと言われている。それはその通りなのだが、このプロセスをたどることができるのは、学力の高い子だけである。低学力の子どもは基礎の部分で躓いてしまう。…低学力の子どもがジャンプの学びにおいて、つまり**基礎的知識を活用する学び**において「これはこういうことだったのか」と**基礎を理解している**光景が頻発していることに気づく。低学力の子どもは、発展から基礎に降りる学びを遂行しているのである。

低学力の子どもほど教師のくどい説明を嫌い、挑戦する学びを好むが、それは根拠のあることであつたのである。もう一つは、これまで学びのプロセスについて「理解→応用」の一方方向で認識されてきたが「**応用→理解**」というプロセスも同時に重要な働きをしていることである。

▲ (お願い) 上記の文は抜粋と省略が多々あります。ぜひ本でご確認をお願いします。

☆ 一応シートは作成したのですが、どうしても紹介しておきたいモノ、コトがありまして追加させていただきます。

「学び合う」授業づくりに挑戦するすべての教師に一読していただきたい。

タイトル：「わたしの学び」

6年1組 M先生 デザインシート【授業者より】

聴く子を育てるためにまず教師が聴くことが大切だと頭では分かっているが、集中していない子どもに「聞かせようとして」注意を促し、全体の流れを止めてしまう事がよくある。自分の考えを言える子の意見ばかり取り上げてしまうことも多い。教師の姿勢が個に向きすぎてしまうと、全体の流れが滞ってしまうことは何回も経験して分かっているが・・・「なかなかうまくいかない」。

「学び合い」では子どもの動きを観る？ 子どもがどこで学び？ どこで学びが躓いたか（滞ったか）？それが授業づくりに本当に役に立つのだろうか？疑問を持ちながら進めてきた。

学年でお互いの授業を見合ってきた、同僚の授業を観察すると、自分が授業をしている時には見えない子どもの動きが見えるようになってきた。ぼそぼそとグループで交わされる言葉に耳を傾けると、子ども達は自分の様々な「知」を語っている。授業に関係ないコトかと思う時もあるが、よく聞くとそうでもないコトもよくあることだと知った。ぼそぼそと交わされるつぶやきからその子の心が見えてきたこともあった。自分の学級でも同じようなことが起きていると思うと授業をしながら少しずつ子どもの動きや表情、子どもの声を聴こうと心がけるようになってきた。授業を参観する同僚の、楽しそうに子どものつぶやきを聴く姿からも、子どもをどう観るのかということが分かってきた。

子ども達は私以上に「学び合い」を体験しているので、私以上に「学び合い」について理解していると思う。

以下、6年1組の子ども達の「学び合い」についてのコメントです。

Tさん：『学び合い』とは学び合わせること。

Aさん：『知る』ということは、知った後に何かを考えたり、学んだりすること。

『知る』と次の疑問が湧いてくる、それが『知った』という証拠になる。

Eさん：考えすぎて眠くなったりしたら、〇〇さんが「がんばろう」と声をかけてくれるよ。

Nさん：〇〇は関係ないことを話しているように思えても、最後まで聴くととっても大切なことが多いよ。

Tさん：友達の考えを聴くと、頭がねじれたようになって「あ～！！と思うよ」

私は子ども達から多くのことを学んでいる。私も子どもの中に入って一緒に学びたくなってくる。

どうです？…この教室の教師と子どもとの関係どう見えます？

私には「なんて幸せな子ども達だろう」という感想にしかいきつきません。

自分に謙虚な教師、私の教育への理念と信念、教育者としてのポリシー、人としての奥深さと慎ましき、ポジティブな情熱と包容力。・・・なんといっても正直な姿勢が信頼される鍵となっていることは間違いない。

すべての教師に、学びの授業スタイルがすぐにしっくりくるとは限りません。特にこれまでの自分の授業理念や方法論を持ち合わせてきた授業者にとっては、学び合う教室づくりへの移行は教師自身にもがきがあり不安があるものです。「学び合い」を受け入れる教師に差異があって当たり前です。大切なことは、M先生のように自分にも子どもにも、謙虚に向き合い、自分にないモノを貪欲に学ぼうという姿勢ではないでしょうか。さらに、子ども達の違いを受け入れるように、教師自身と他者との違いを受け入れることです。♡『わたしなりに』を大切に♡

ついでにもう一つ



さて、右の2枚の写真どこのクラスでしょう。6年1組と3組にはさました。6年2組の教室です。

1組と3組がやっている、「ほくも頑張らなければ」である。

「同僚性の構築」「ベクトルをそろえる」・・・学校改革はすべての教師が向かわなければ達成できない。僕なりに焦らず進んでください。